

救急外傷外科の専門医育成へ 研修プログラムを作成

県立中央病院・徳大病院

事故や災害などで大けがをした患者を治療する診療分野「ACS」（救急外傷外科）に精通した人材を育成しようと、県立中央病院と徳島大学病院が研修プログラムを作った。南海トラフ巨大地震などの大災害における医療態勢の強化や、外科・救急医の後継者不足解消につなげる。県内外から参加する医師を募り、2025年度から運用をスタートさせる。

ACSは05年にアメリカで誕生した外科診療分野。集中治療室を必要とする内臓や気管などの損傷を治療する。一般的な救急医療よりもさらに外傷に特化した分野で、重傷患者の治療方針を迅速に決定したり、最適な緊急手術を行ったりするのを目指す。特に短期間で大勢の重傷患者を救命しなければならぬ災害では重要視されている分野だ。プログラムは県内外の若手医師らが対象で、米国名医の著書を引用して「トップナイフプログラム」と名付けた。

高度な救命医療が必要な重傷患者を受け入れる「三次救急医療機関」に指定された。県内の救急科専門医は35人いるが、ACS認定外科医の資格を持っているのは大村さんしかいない（6月

大村さんは「全資格を取得すれば、あらゆる外傷と疾患に対応できる医師になる。徳島だけでなく全国の救急現場で欠かせない存在になるだろう」と話す。

大村さんは「ACS認定外科医の資格取得を目指す。全ての資格を持つ県立中央病院救急外科・外傷センター長の

災害時の医療態勢強化



若手医師に研修プログラムの説明をする大村さん（右）＝徳島市の県立中央病院

末時点）。南海トラフ巨大地震では、県の想定で4100～5900人が重傷を負うとされており、「県内で大災害が起きても医師が足りず、重傷患者が命を落とす可能性がある」と大村さんは指摘する。

自身のスキルアップのために県外や海外の医療機関に転職する医師も少なくない。大村さんはプログラムを通じて「徳島でも研

25年度の運用開始に向けて参加者を募っている。大村さんは「徳島の外傷診療のレベルを底上げしたい」と意気込んでいる。

（濱岡幸宏）